

テーマ：狂言鑑賞会 『狂言の手法と意味』

日時：平成14年11月9日（土） 午後1時30分開場・午後2時開演

会場：高井戸地域区民センター

講師：山本 東次郎様 他、山本会のみなさま

司会（小助川 義夫さん）

こんにちは。私は今日の司会をさせていただきます高井戸地域区民センター運営協議会委員の小助川でございます。開演に当たりまして、当センター運営協議会会長の内藤博孝よりご挨拶を申し上げます。

内藤 博孝さん

どうも皆さんこんにちは。きょうは午前中からみぞれまじりの悪天候で、非常に寒い雨天の中、来ていただきまして本当にありがとうございます。大蔵流山本会の山本東次郎先生にご無理申し上げて、当地域区民センターで狂言の鑑賞会を開いていただくことになりました。きょうは1日、4時ごろまでですが、楽しんでいただきたいと思います。

我々、運営協議会の会長、きょうのスタッフも同じですけれども、先月10月下旬より新たに役員として幹事になりました。不手際な点あるかと思いますが、何かありましたらご意見等お話いただければ幸いと存じます。きょうは1日楽しんでください。ありがとうございました。

司会

きょうご出演される大蔵流山本会のご紹介を申し上げますと、この狂言鑑賞会は、重要無形文化財に指定を受けておられます、4世山本東次郎さんが率いられる狂言方です。演じる演目は、『附子』と『二人袴』の2演目。それから、最後に山本東次郎先生から狂言に関するお話をしていただく予定になっております。それでは皆様、ご出演の方々、よろしくお願いいたします。

狂言の解説者 若松 隆さん

皆さん、こんにちは。（拍手）ただ今ご紹介いただきました、私ども山本会の代表であります山本東次郎から後で狂言に関するいろいろなお話をさせていただきます。

最初にご覧いただきます狂言は『附子』です。狂言の基本というのは笑いの芸です。演技者の台詞と仕種によっていろいろなものを皆さんにお見せしています。この舞台の上には大道具のセットなどありません。また、照明の変化等などによっての表現もありません。演じる者の言葉や動きによっていろいろなものをお見せしています。きょう演じます二つの狂言も、そういう要素がふんだんに含まれております。言葉や動きに注目して下さい。

『附子』（ぶす）のあらすじ

主人が外出する時、大切にしている水飴の入った桶を、召使二人に、この桶

には「附子」という毒が入っているから気を付ける様にといって出掛けます。召使は怖いもの見たさで桶を開けて全部食べてしまいます。主人が帰って来て大騒動。どうなるかお楽しみ。

それでは、出演者のご紹介をさせていただきます。主役を「シテ」、相手役を「アド」と申しますが、「シテ」の太郎冠者を演じますのは山本泰太郎。また、相手役の「アド」の次郎冠者を演じますのは山本則孝。そしてもう一人、主人を演じますのは山本則俊。山本泰太郎、則孝は山本則直の、後ほど『二人袴』に登場します則直の長男と次男に当たります。小さい頃から自分の父、そして、おじからきびしい稽古をうけ、若手の狂言師として、舞台上で活躍しています。

そして主人を務めます山本則俊は、平成2年度に芸術選奨文部大臣新人賞を受賞し、現在、国の重要無形文化財として活躍しております。

それでは、ごゆっくりご鑑賞ください。（拍手）

『附子』上演 23分間

狂言の解説者 若松 隆さん

『二人袴』のあらすじ

親離れしない息子が贅入りすることとなり、子離れしない親と一緒に相手の家に挨拶に行くことになった。だが、親子には礼服の袴が一着しかない。格好を付ける親子のドタバタ騒ぎは、いったいどうなることか。

それでは、今度は『二人袴』という狂言をご覧いただきます。

最初に、お舅さんが召使の太郎冠者を連れてこの舞台上に登場しまして、お舅さんは自己紹介をいたします。先ほどの『附子』の中の主人もそうだったので、狂言の中での主だった登場人物は、その役柄の人の言葉で、見てらっしゃる皆さんに、最初の場面設定、その人の置かれている立場を大体説明してしまふことがあります。登場しましたお舅さんは、きょうはとてもお日柄がいいということで、贅(むこ)殿が来る。だから、太郎冠者に掃除等を命じようと言って、太郎冠者を呼んで、掃除をしろということで、この舞台の後方に座って控えてしまいます。そして、親とお贅さんが登場して、場面の転換が図られていく形になるのです。この曲は贅入りをテーマにしています。

贅入りというのは、結婚をした後、お贅さんが、一番最初に初めて相手の奥さんの親の元へ、挨拶をしに行くことを言っております。歳の若い贅さんですから、自分の親と一緒にに行くに当たって、行くのならば何か欲しいということで、犬っころをくれとか、弁慶の人形が欲しいとかおねだりをして、そして行くことが成立し、しかも、親もついて行ってくれということになってしまふのです。贅が相手の家に上がるに当たって、正装するために袴を贅のために一つだけ用意して出かけたのが災いして、後半の流れになって参ります。

「さすがみ」という言葉がでてきますが、舞を所望されたときに、「さすがみ

がござる」と聲が申します。これは、ちょっとした悪戯をするような神様のことを指して言っております。

それでは、出演者を紹介させていただきます。主役の「シテ」、親を演じますのは山本東次郎です。山本東次郎は、私ども山本会の代表者で、江戸時代から続く大蔵流狂言山本家の四代目の当主に当たります。この杉並の和田1丁目に杉並能楽堂がありまして、そこで、きょう出演しております山本会の出演者たちは小さい頃から稽古に励み、いろいろな能楽堂、会館に行って狂言を演じさせていただいているのですが、そちらに東次郎はおります。平成4年、芸術選奨文部大臣賞を受賞し、現在、国の重要無形文化財として活躍しています。平成10年には芸術文化に貢献してきたことが認められ、春の紫綬褒章、そして昨年は外国の文化財団であるエクソンモービル文化財団から、やはり文化に貢献をしてきたということで、モービル音楽賞をいただきました。1ヶ月ほど前、玉川大学出版部から、『狂言のことだま』という本を上梓させていただきました。機会がございましたら、これもお読みいただければ幸いです。

相手役の「アド」、聲を演じますのは山本則秀です。そしてもう一人、太郎冠者を演じますのは山本則重です。則重と則秀は東次郎の甥に当たり、そしてまた、先ほど登場しました主人を務めました則俊の長男と次男に当たります。ですから、『附子』に登場した泰太郎と則孝とはいとこ同士の関係に当たるわけです。小さい頃からやはり、父、おじたちを師匠とし、現在若手の狂言師として活躍しています。

そして、舅を演じますのは山本則直です。山本則直は昭和51年度に芸術選奨文部大臣新人賞を受賞し、現在、国の重要無形文化財として、東次郎、則俊と共に能狂言の舞台上で活躍しています。これまでに国立能楽堂で後進の指導に当たり、また、現在、東京の調布市にありますアメリカンスクールでは、国外から来るいろいろな外国人のティーンエイジャーの方たちにも狂言の指導をしております。外国人の方も日本の文化に興味を持っていて、自分でもやってみたい、演じてみたい、そんな方が沢山いるわけです。

それでは、『二人袴』をご覧ください。（拍手）

『二人袴』上演 37分間

狂言の解説者 若松 隆さん

ありがとうございました。（拍手）海外でもいろいろなところで狂言公演があります。先ほど、舅を務めました則直が、アメリカンスクールなどで学生さんに狂言の指導をしているというお話をさせていただきましたが、今年の5月18日に、ユネスコから世界の無形文化遺産の第1号ということで、狂言、やはり同じ舞台上で演じられる能が第1号の認定を受けました。そして、その記念の式典が、パリにありますユネスコの総本部で行われましたが、今、聲を演じました則秀、そして、先ほどの柿の木の持ち主を演じました則俊が、私どもの能や狂言の世界を代表しましてその式典に列席し、そこでも『寝音曲』という狂

言を親子で演じて参りました。

つい2ヶ月前に、今、出演しました東次郎と泰太郎と則重が、中国の日中国交復帰30周年の記念の式典で、中国の京劇の方と日本の古典演劇である能狂言の舞台がありまして、そちらに出かけて行ったんです。中国の方も狂言を三つご覧いただいたのですが、非常に理解していただきまして、非常に楽しんでいただくことができました。

後ろに、老い松の絵が描かれておりまして、このように橋懸りが設けられております。能楽堂といって能狂言が専門に演じられる劇場の中に足を一步踏み入れますと、そこにまた屋根のついた舞台があります。私は能狂言の世界に入ってきて、その舞台を初めて見たときに、とても不思議な感じがしたんです。屋根のついている舞台というのは他にも皆さん記憶にあるかもしれませんが、昔のお相撲の両国の国技館には屋根があって柱がありました。今は、柱がないのですが、この能舞台にも4つの柱がありまして、大きな屋根を支えています。劇場の中にあるのだから、あえて柱や屋根はなくてもいいということもあるのです。

それではお話お願いいたします。（拍手）

山本 東次郎さんより「狂言についてのお話」

皆様、ありがとうございます。今、二つの狂言をご覧いただきました。これから少し狂言について申し上げます。

ほんとうなら、見たまま感じたままを受けとってくださっていいはずなのですが、狂言はできましてから数百年の時間が経っています。同じ日本人でもこれを作り出した頃とはものの考え方がほんとうに変わってしまいました。ですから、現代の表現方法と狂言の表現方法は根底のところでは非常な違いがあって、今の方々にはわかりにくいことも多いと思います。今は古典の世界の人たちも現代に馴染もうとして、その本質をどんどん変えていってしまっているのではないかと思うのですね。ほんとうにそうなのでしょうか。いったい現代がどれだけ優れた時代だというのでしょうか。そう思うこと自体に、私は疑問があるとお伝えしたいと思っております。今、私たちは狂言のセリフを非常にゆっくりと言っておりました。昔の人たちはのんびりしていたから、しゃべり方もゆっくりなんだ、というように片付けられてしまいましたが、ここにも深い考え方がありまして、そういうことをお話ししたいと思っております。

狂言を生み出した頃の日本人には言霊（ことだま）信仰がありました。言霊信仰とは、言葉には魂があるという考え方です。私たちは、ある言葉をかけられたことによって、嬉しくもなり、楽しくもなり、幸せを感じたりします。また逆に、ある言葉をかけられたことによって、辛くもなり、不幸を感じたりもします。人の心をこれほど変えてしまう言葉には、きっと魂が宿っている。ですから、昔の人たちは言葉に対してとても丁寧な敬虔な態度で接したのです。それに比べて現代は、言葉を浪費し、弄んでいます。相手の人のことを考えずに、自分の言いたいことを勝手にしゃべって、この内からいくつか拾ってもら

えばいいというくらいの気持ちでいると思うんです。しかし、昔の人は、一言一言丁寧に言葉を選んで、相手のことを慮って差し上げる。相手もまた同じように言葉を選んで返してくれる。そういうところで言葉というものに対してとても丁寧なお付き合いが成り立っていたのだと思います。

しかし、現代の人たちの心の中にもやはりどこかで言霊信仰があります。例えば受験生には、「滑る」「落ちる」とは言いませんね。結婚をする人には、「別れる」「切れる」という言葉はなるべく使わないようにしようと思います。一度言葉を出してしまうと、それが実際に起こるのではないか、現実になってしまうのではないか、という恐れがこの科学万能の世の中にもあるわけです。もちろんそれは昔の人々の言霊信仰とは比較にならないでしょうが。狂言はそういう時代に生まれ、育まれたものですから、言葉を非常に大事にします。私どもの伝承の中には、「狂言は言葉でせよ」、「狂言は言葉です」という教えがあります。選びに選んだ言葉をお伝えしたい、丁寧に心を込めてお伝えしたいということです。

また、狂言の表現方法は、現代のものとはずい分違います。例えば暴力を振るう場面があります。今、皆様方が馴染んでいらっしゃるテレビ、映画の暴力シーンは、大変迫力があります。相手の横っ面をバシッと殴りつける。相手はふっ飛ばす、顔は腫れる、鼻血が出るなんてところまで描いております。それに比べると、狂言の暴力シーンはつまりません。なぜならば、叩く人と叩かれる人が3メートルも離れて演技しているんです。（笑声）ちょっとやってみます。

実演（拍手）

たったこれだけなんですね。迫力も何にもないアクションシーンです。（笑声）こうやって叩くような動作をして参りまして、最後にドンと一つ足拍子を踏む。これはさんざんに相手を殴り痛めつけて、最後に相手を蹴り倒したという表現です。叩かれた人は向こうに逃げて行って、トンと片膝をつきました。あれは、さんざんに打ち負かされ、最後に足蹴にされ、地べたに倒れ込んだということを表しているのです。なぜこんなふうに表現するのか。この辺が現代人と昔の人との考え方の違いです。

暴力なんてものは汚らしいもの、醜いもの、だからほんとうはやりたくないのです。けれども狂言は人間の愚かな姿を描いています。二百番の狂言の中には暴力シーンを取り上げ、描かなければならない場合も当然出てきます。ではどうやって演じ、表現し、見ていただいたらいいか。いろいろ考え抜いた挙げ句、醜い、汚らしいところだからこそ綺麗に演じよう、お行儀のいい演技で表現しようというので、先ほど私がいたしましたような暴力シーンが出来上がったのです。

現代の表現方法とは正反対の考え方です。これでもか、これでもか、本物そっくり、本物以上の迫力でそういうところを見所に据えて、より刺激の強い

形で描こうとする、それが現代です。確かにそういう刺激の強いものは面白い。娯楽として一方にあるのも結構ですが、気をつけていただきたいのは、刺激というのは、必ず慣れが参ります。最初に見たときはすごいと思ったものが、繰り返し見ていくと、いつか何でもなくなってしまふものなのですね。これが刺激というものです。つまらなくなってしまいますと、もう一段階強い刺激を求めます。そして、それに馴染むと、また上、また上と、そうやってどんどん強い刺激を追いかけていく、それが現代ではないかと思うんですね。どこかで踏みとどまり、突き放すということをしないで、どこまでも際限なく追いかけて行く。

映画でも数十年前のものは、そんなに刺激が強くないので、私たちが見てもはるかに楽な気持ちで見ることができます。今はほんとにすごくなってしまってリアルに、リアルにと持っていてしまっています。判断のできる大人の娯楽としては、まだ許されるかもしれませんが、判断のできない幼い方たちが、そういうものにいつも接している、影響を受ける、それは恐ろしいことだと私は考えるのですが、いかがでしょうか。

アメリカの議会でもテレビ番組の過激な暴力シーンが問題になっています。カナダやイギリスでは、しっかり規制をかけたといわれていますね。日本でもこのところ、そういう議論が持ち上がっています。けれど古い日本人たちは、そんなこと最初から考えておりません。受ける側、見る側の心を柔軟に敏感にしておくことが大事で、向こうから、つまり、画面なり、舞台から発せられるものは、ある一定のものでよろしい。それを受け取った人が自分の中に取り込んでから、大きくも小さくも、高くも低くも、どうにでもしようという考え方です。けれども今は過激なものばかりになれてしまい、目の当たりに見えるものしか見えなくなって、想像力を働かせるということができなくなってしまっているのだと思います。

一幅の絵を見ても、名画にはいろいろなものが見えてきます。イメージーションが浮かんできます。音楽も演劇も舞踊も、あるいは文学、文芸も、良いものは皆、同じです。我々古典の世界の者から言いますと、説明過多は観客に対する僭越で失礼な行為と考えます。だから一線を引いて待っているのです。今は作る人たちの論理で、一方的に押しつけていますね。あれは「見ていただく」のではなくて、「見せてやるんだ」という思い上がりです。古典は、あるところまで行って待っている、そうすれば皆さんはちゃんと見てくださると考えています。それは観客の知性、感性、教養、美意識を信じているからで、それに期待をしているから待つことができるのです。与えられるものだけに慣らされてしまうと、そこからものを手繰り寄せ、自分の頭で考えたり、想像を巡らせることができなくなってしまうのです。

つい最近、映画監督の吉田喜重先生とお話をしたのですが、「私の作品も初期のころは、先輩たちに説明し過ぎだと言われたものです。それが、30年も40年も経ってみると、今の人たちの作るものに比べてぜんぜん説明的でないなと思います」、とおっしゃっていました。私のようなものは、映画はリアルなも

のと思っていたのですが、やはり以前にはそうでないものを見せようとしていた時代があったのだと思いました。しかしそこでもやはり、そういう考え方がどんどんなくなっていってしまうわけです。

先ほど『附子』で、掛け物を破く場面がありました。「サラリ、サラリ、パツタリ。」それからお茶碗を壊す場面、「エイエイ、ヤットナ。ガラリ、チーン。」あれをご覧になると、たいていの方は、「ああ、狂言は受けを狙って、観客に笑ってもらおうと思って、殊更あんなばかばかしいオーバーな表現をとって見せているんだ。」つまり「くすぐりの演技」と思われるかもしれませんが。現代人の目から見るとそう映るかもしれませんが。でも、実はそうではないのです。物が壊れることは、心ある人たち、たしなみのある人たちにとっては、決して気持ちのいいことではありません。そういうところはできるだけ遠回しの表現にしておきたいというわけで、「サラリ、サラリ、パツタリ」、「ガラリ、チーン」とするわけです。不快とならない表現を取るのです。たわいなく、ばかばかしくお目かけながら、その奥でちゃんとそういう配慮がなされている。これが古典の世界のやり方です。結果、現代の人たちは、「だからつまらないんだ」とおっしゃるかもしれません。でも狂言が考えるのは、いかに大事なものを残しておきたいか、守っておきたいかということで、そうした配慮をしているのです。

狂言の世界にはこんな戒めがあります。「世間の狂言らちもなく、あわただしくろくがわしく、そぞろ事を言い、くねくねしく顔をゆがめ、目口を広げ、あらぐ振る舞いをして人を笑わすればしもざまのものは喜び、心ある人はまばゆからん」つまり、目口を広げ、くねくねしく派手な動作をして、くすぐりのようなことをするのは、狂言にはふさわしくない、だから決してやってはいけないという教えです。心ある人はまばゆからん、つまり見るに耐えないということなのです。

ところが、この頃はそうではありません。今朝、テレビを見ておりましたら、あるお笑いタレントの方が、それこそ身体をくねくねし、目口を広げて、人を笑わせようとしていました。その人を批判しているのではないのです。ただ、その方たちが、今、学園祭で非常に人気があるということなのです。ということは、最高学府に学んでいる大学生たちが好んでいるんですね。つまり、心ある人が大学生にいらなくなってしまうということかもしれないんですね。何か私、とても寂しい気がいたしました。それはそれなりに楽しいことかもしれないけれども、どこかで、そういうものを覚めた目で見えていただくということがあってほしいと思います。

バラエティー番組で綺麗に作ったデコレーションケーキを人の顔にぶつけてみたり、綺麗なお店に車が突っ込んで、中の商品をめちゃめちゃにして笑っている。面白ければいい、おかしければいい、楽しければいい。そういう考えもあるでしょうが、必ず何割かの方はそういうシーンで眉をひそめ、顔を背け、ここまでやらなくたっていいのにねえ、そう思っておいでの方、たくさんいらっしゃるはずですよ。

評論家の秋山ちえ子さんがある時、おっしゃっていました。「いい映画を見ました。それはよかったのですが、その前に流される予告編の中で、大勢の人のいるところで爆発が起ったり、人の上に何かが崩れ落ちてきたり、高いところから人が落ちたり、追い回されたり、撃たれたり刺されたり・・・。そんなことばかりやっている。いい映画の前にそんなもの見せられたらね、せっかくの気分が台無しになってしまう。もうこんなこと、やめたらいいのよね。」私も、全く同感です。面白半分に危険に晒されている人間の命、例え絵空事、フィクションだとしても、あんなに簡単に人を滅茶苦茶にするようなことを日常的にやっているというのは、やっぱりおかしいです。

だからと言って古典を宣伝するのではないのですが、古典は、そういう意味では人間を大事にします。ですから、舞台から観客を脅かすということは決してしません。ほんとうはこれ、結構効き目のあるものなのです。そろそろ皆様飽きたなと思ったら、パッと脅かすのです。するとハッとして見てくださる。そうして、また、舞台の方に引っ張っていけます。こんなことは昔の人だって知っておりました。けれども、教えのなかに、「どんなに辛くとも、そういうことは決してやってはいけない」と言われております。それは、観客を尊んでいるからだとは私は思います。観客を大事にしたい、一人一人の感性や美意識を大事にしたいということなのです。皆様方がそれぞれ、お心の中にイメージーションをいっぱい広げていらっしゃる、そのときにパッと脅かしたら、そうした心の中の思いが途切れてしまう。これは失礼なことです。ですから、これだけはやってはいけないという心得があるのです。舞台をご覧になって心のなかに、それぞれのイメージーションをいっぱい広げていただく。それは、お一人お一人にしかできない、ものすごく知的な楽しみです。もっともっと深いものをご自分で見つけて、作っていくということです。そんなものを大事にするために、打って出ることを、極力戒め、こちらは引こうとしているのです。

これは、『未広』（すえひろがり）という有名な曲の「果報者」（かほうもの）の姿ですが、曲の最後で太郎冠者の面白い謡に連れて、幸せな心が非常に高揚してきたというところを演じてみます。

（『未広』 実演）

これは太郎冠者の面白い謡に連れて、主人の「果報者」が、この囃子物に打ち興じて服装を乱したという姿です。服装を乱すということなら、実際に乱せば簡単です。でもそれは観客に対してお見苦しいものをお目にかけることだと狂言は考えます。ですからきちっと形を作って、その上で片袖だけ脱ぐ。これで服装が乱れたつもりで見ていただく。そして最後に、乱れた服装の居住まいをパッと正して終わる。きちっと居住まいを直して皆様方にお目にかけて終わるという礼儀なのです。狂言はこんなことまで考えているのです。

日本にはこんな考え方もあったのだということ、日本の古典に心を留めていただけたらと思います。ありがとうございました。（拍手）

司会

東次郎先生、少々お留まりください。観客と運営協議会のお礼の印に、花束を贈呈させていただきたいと思います。（拍手）どうも、山本会の皆様、ありがとうございました。（拍手）ここで、運営協議会の副会長の内藤千秋から、終演のご挨拶をさせていただきます。

内藤 千秋さん

内藤でございます。本日は、山本先生はじめ山本会の皆様、私どもの高井戸地域センター運営協議会の能楽の鑑賞の申し入れに対して、快くお引き受けくださいまして、まことにありがとうございました。（拍手）また、非常に丁寧なご解説をいただいて、ご出席の皆様方も、これを機会に、ますます狂言に興味を持って参加されるのではないかと思います。きょうは、本当にありがとうございました。また、お集まりの皆様も、大勢の方がご出席いただきまして、まことにありがとうございました。高井戸地域の運営協議会といたしましても、こういう文化活動をはじめ、体育活動、その他、皆様に喜ばれるような催し物を、今後とも続けていきたいと思っておりますので、これからは是非、ご出席くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。また、今回の運営にたずさわっていただきました委員の方々、本当にどうもありがとうございました。（拍手）これをもちまして、本日の鑑賞会を終了といたしたいと思っております。どうもありがとうございました。（拍手）